



日本古来の「たたら製鉄」は、私たちの暮らしを支える重要な産業であり続けてきました。その技と歴史の始まりは神話によって彩られています。

たたら製鉄を伝える出雲神楽

私たちはスサノオのヤマタノオロチ退治神話の世界を、神楽を通じて体感することができます。出雲地方では、この神話を「たたら製鉄の歴史」と重ね合わせながら語り継いできました。登場するヤマタノオロチは砂鉄採取の影響で氾濫する川になぞらえ、退治したオロチから取り出された剣を製鉄へ

日本遺産「出雲國たたら風土記」鉄づくり千年が生んだ物語③ 神々が伝えるたたら製鉄

の象徴に、イナタヒメは砂鉄採取の跡地に拓かれた稲田に見立てています。神話は、神代の時代からたたら製鉄がこの地域の生活や文化と切り離すことのできないものであったことを表しています。



▲各地で舞われる神楽は神代の世界を伝えています。



▲金屋子神社本殿は総ケヤキ造。

鉄の神様を祀る金屋子神社

広瀬町には鉄の女神様「金屋子神」を祀る金屋子神社の総本社があります。金屋子神は現在の兵庫からシラサギに乗って広瀬町西比田にたどり着き、この地にたたら製鉄の技を伝えました。人々は金屋子神にお参りし、製鉄や鍛冶などの仕事の成功を祈ってきました。

た。たたら製鉄が盛んであった江戸時代から明治時代には、中国山地をはじめ大阪、四国、九州でも信仰。金屋子神社の鳥居や灯籠には各地の信仰者の名前が刻まれ、信仰の広がりを知ることができます。

一方、金屋子神には興味深いエピソードがいくつかあります。例えば、好物であるミカンをいただくと、無病息災で過ごせると言われています。

たたらに関する出前講座を実施します。詳しくは和鋼博物館（電話23・2500）へ。



安来市加納美術館だより 電話36-0880

企画展「山本陶秀と青戸慧 —日本の心を視る—」間もなく

20年前の開館に際して、創設者の加納溥基は、加納莞菴の絵画や書および平和運動の資料のほか、古備前や備前焼の名品、茶の湯の名碗、小野竹喬と池田遙邨の日本画および安来ゆかりの作家の作品を収集しました。

12月10日から始まる企画展では、コレクシヨンの中から、山本陶秀と青戸慧の二人の作品を紹介いたします。

ろくろの名人といわれた陶秀は、温雅な作風が高く評価さ



山本陶秀「獅子置物」

れ、81歳で人間国宝に認定されました。常に新しい備前焼や自分らしい備前焼を目指して制作に励みました。

安来市出身の青戸慧は、17歳の時に塑像作品が商工省工芸展で初入選。以来、多くの塑像を作りましたが、戦後は和紙を素材とした紙塑人形作家に転じました。また墨彩画でも新たな境地を切り開いてきました。

二人は独自の世界を築くことを大いなる喜びとしました。作品を通して、モノづくりの感動に出会っていただけたら幸いです。

《会期》12月10日(土)〜平成29年3月13日(月)まで。なお、12月25日から1月10日と毎週火曜日は休館。

《開館時間》9時から16時30分。ただし入館は16時まで。
《入館料》一般1000円、学生(高校生以上)500円、団体(20人以上)800円。